慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	価値と経済的ディメンジョン : ゴットルの価値論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.5 (1933. 5) ,p.685(27)- 732(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19330501-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330501-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

へない。この意味に於いて彼の勞働科學は Taylor の科學的管理法に依つて著明にせられた、云はゞ現代社會の實際的要求である勞働能率の增進といふ資本家的要求に奉仕すべく漸次擴大深化せられ來つた科學的研究の發展過程に於ける最近の業蹟である。それは正に科學的管理法—精神技術學—勞働科學なる一連の發展の最近の段階を示すものであつて、その所謂科學的研究の發展を指導し來れる精神が資本家的要求に基礎づけられてゐる。

Lipmann の勞働科學の意義をかくの如くに解することに依つて吾々は、彼の勞働科學の存在の眞の意義を求め得る。此處に再び私は讀者の注意を本節の初頭に引戻して、更らに私は次ぎの如き問題を讀者に提供しやう。即ち、Lipmann の勞働科學は他の諸見解に比して何故に優れた意義を持つて居るか、私はこれに對して次ぎの如く回答し得るであらう。勞働の合理化に關する資本家的要求は實踐的には lebensfern な抽象論を慾しない。彼が勞働科學に於いて、從來の勞働生理學並に勞働心理學の存在にも拘らず、作業力なる概念を持ち出したこと、而して彼自ら自任するが如く實踐的任務を重視する勞働科學に於いて右の兩科學部門の存在、否從來の總ての勞働に關する應用諸科學の存在を有効に利用して、その上に他の何れの科學的所産に比しても優れた、資本家的要求に具體的に役立ち得る實踐的諸方策の科學的結論を提供しやうとする企圖を充分滿してゐる。

註二八　Lipmann, Lehrquch, S. 393 ff.

附記　本稿は特に私の多忙の際に——私は仙臺に開かれる第四回日本心理學會に出席のために間もなく出發しなければならぬし、又そのための準備も必要である際に——急いで書かねばならなかつたので、多くの點に於いて不充分なるを免れなかつた。此の點は驕て後の機會に補正することゝして此處に讀者の寛恕を乞ひ度い。

一九三三年四月十六日稿了

價値と經濟的ディメンジョン

——ゴットルの價値論——

氣賀健三

一　價値學說無用論概觀
二　「言葉の支配」
三　「生活としての經濟」
四　「經濟的ディメンジョン」
五　價値か經濟的ディメンジョンか

一　價値學說無用論概觀

經濟學上の價値理論は、前世紀の後半に於て、所謂る限界效用學派の出現に依り新生面を開拓され、一大發展を遂ぐるに至り、價値理論は一時は限界效用說に依りて頂點に達せんとしたるが如き觀を呈した。が日進月步の人間の智識は該學派が其儘眞直に成長することを許さなかつた。例へば今日、一般に限界效用學派と稱へられて居る所のものは既に、或は英國の傳統的な客觀的價値學說と妥協して折衷學派又は劍橋學派に、或は數學派の主張を取入れたる平衡論又はローザンヌ學派に、或は又ジョン・ビー・クラークに率らるゝ所謂る亞米利加學派等に分解され、

その各分派それ〴〵が本來の效用說又は墺太利學派に對して或は修正を加へ、或は改良を施して居る有樣である

墺太利學派の素直な成長を妨げる障害は上記の樣な內部的分裂から生れて來たもの許りではない。マルクシズムを奉ずる人々はマルクスに依つて與へられた勞働價値學說を其儘、盾に取つて外部から頻に該學派を攻擊して居る。社會主義的な斯樣な一面的議論は暫く措くとしても、更に一つの新しい障害が前世紀の終る頃生れ、現世紀に爲つて急速な勢で擴つて行つた。價値學說無用論即ち之である。價値學說無用論の魁と爲つた議論は一般にフリードリッヒ・フォン・ゴットルオットリリエンフェルトの「價値思想、經濟學の曖昧なる獨斷的敎義」（註一）と題する小冊子であらう。

註一　Friedrich v. Gottl-Ottlilienfeld; Der Wertgedanke, ein verhülltes Dogma der Nationalökonomie. Kritisches Studien zur Selbstbesinnung des Forschens im Bereiche der sogenannten Wertlehre. Jena, 1897.

ゴットルが此書を著した一八九七年頃は、恰度現代の主觀的價値理論は唱導されてから間もない頃であり、其理論は充分に說明されもせず又理解も行屆いて居らぬ時代であつた。加ふるに其以前の理論には確定的統一的なものが無かつたのである。從つて此方面に向つて新しく研究を始める者が價値理論の混沌たる狀態に直面して唯徒に迷ふより外に爲すことを知らなかつたのは無理も無い次第で、「專門家に向つて一體全體『價値論』に於て確保されて居る學問上の占有狀態たる可きものは何であるかと直截に問ふた場合に、之に答へる爲に少しも當惑せぬ專問家が何處に居るであらうか」（註二）といふ考を、ゴットルが價値論に就いて當時懷くに至つたのも亦決して偶然では無い。

註二　F. v. Gottl; Wirtschaft als Leben, S. 8. 參照

在來の價値理論に對する斯樣な不滿は以後或は之を無用と爲し全く之に賴らずして經濟的交換現象一般を說明せんとする試みや、或は「價値」なる稱呼の下に從來使用され來つた概念を使用しないで、全然別箇の方法に依り新規に構成せられたる概念を利用して價格形成の現象を說明しやうとする努力をば漸次隆盛ならしむるに至つたのである。斯る努力や試みを果した代表的人物としては、例へば今述べたゴットルを初としてカッセル、リーフマン、パレト、ディーツェル、等が擧げられる。今日一般に價値論無用論と呼ばれて居る所のものは實に此等の人々の斯樣な努力なり試案なりを包括する言葉である。而して一概に無用論とはいふものゝ其には二つの意味がある。一つは單純に價値論の無用を主張するもので他は在來の價値論の價値を全く否定して、其代りに之に相當する獨自の價値論を提案するものである。前者の部類に屬する最も明瞭な學者はグスタフ・カッセルである。嘗て述べた如く（註三）カッセルは專ら限界效用說に其攻擊を集中し、之を以て「少くとも經濟學に取つて全く必要なきもの」（註四）「明に本來の經濟理論の領域外に在る研究」（註五）と爲し價格形成の說明は價格の平衡理論を以て足りると說くのである。

註三　三田學會雜誌二五卷九號拙稿參照

註四　G. Cassel; Theoretische Sozialökonomie, 3. Aufl. S. 41, S. 68, S. 69.

註五　Cassel; a. a. O. S. 68.

カッセルの此企てが其意圖通りに行はれ得るものでないことは嘗て筆者の論證した通りである。事實、彼の價格形成論は無意識的に又は暗々裡に、限界效用說を基礎に置いて居るものなのである。

カッセルと同じく價格平衡論を論述しつゝ、「使用價値、效用、オフェリミテ（Opheliimité）及びオフェリミテの程度等の觀念は經濟的平衡の理論の說明を頗る容易ならしめるが、併し此理論を構成する爲に此等のものは必要ではない」（註六）といふパレトーの主張や同じローザンヌ學派の流を汲むバローネの、「何等正確な內容を持つて居らぬ『價

値』なる稱呼は『交換關係』なる概念か又は正に『價格』なる概念と之を置換えた方が實際的であらう」（註七）といふ說明を聞くならば、吾人は此等二人ながら共にカッセルと同樣に單純に價値論の無用を說く部類に屬する人々と見て差支へないであらう。此等の人々が單に經濟的平衡狀態を說明する爲に函數的觀察に滿足して居る時は、確に價値概念を必要としないが、斯る平衡狀態を生ぜしむ可き關係を因果的に說明する必要に迫られる時に當つては、パレトーはオフェリミテの概念を詳論し、バローネは效用及び限界效用なる言葉を使用して居ることはフロイゲルスが正當にも指摘する所である（註八）。

註六　V. Pareto; Manuel d'economie politique. 2. edit., 1927. p. 160.

註七　E. Barone; Grundzüge der theoretischen Nationalökonomie, übers. von Stachle, 1927. S. 42.

註八　W. Vleugels; Zur Verteidigung der Wertlehre, Schriften des Verein f. Sozialpolitik 183/I. S. 257. 參照

更に「カッセルの所說に全く贊成する」（註九）といふディーツェルも亦單純なる價値論無用論者の中に編入さる可きものである。

註九　H. Dietzel; Vom Lehrwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Markschen Verteilungslehre, 1921. S. 3.

ディーツェルは唯、單にカッセルの所說に贊成するに止まらず、古典學派の理論が既に價値理論を必要とせざるものであることを力說する。即ちスミスやリカードオの學說は一見如何にも價値學說を說くもの丶如く見受けられるが、それは本來決して價値論ではなく唯、市場價格論としての交換價値理論に過ぎぬのであると說く。即ちディーツェルに取つては、カッセルが明白に主張して居る樣に、價値の代りに價格を置けば、それ丈けで充分なのである。吾々が若し市場經濟のみを研究の對象に定め、市場價格と需要供給の關係との說明のみを以て滿足して居るのであるならば、確にカッセルの說明で足りるであらう。が併し一度び、價格形成の機構から奧深く進んで價格決定の究意事情の探究に迄及ばんとするならば、單なる價格形成論のみでは不充分であることは吾人が曩に論證した通りである。

上記の諸家は何れも單純なる價値論放棄論者と見て差支えない。之に對しリーフマンとゴットルとは此等の人々と些か趣を異にする。といふのは外でもない。此後の人々には獨特の出發點があり、獨自の方法論に據つて其主張を說き擴げて居るのである。而して單純に價値論一般を排斥するのでなく、獨自の立場から從來の價値論に相當するものを築き上げて居る。換言すれば價値論一般の無用を唱へるのでなく、從來の價値理論の不必要、無益を說き、他方に於て「價値」といふ名稱を藉りずに新しい「價値理論」を打樹てるのである。

リーフマンに就ては嘗て他の機會に述べたが（註一〇）此に簡單に再言するならば、彼は心理主義的、個人主義的方法を採用し、限界效用學派や古典學派が據れる所の、彼自らの所謂る「技術的、物質的出發點」を排斥する。「技術的、物質的出發點」といふのは一定財貨の存在量を想定し、此等の財貨に結び付けて價値概念を考察する其考察の仕方を指していふのである。リーフマンは限界效用學派や古典學派が假定する所の此「財貨の稀少性」といふ前提を虛構なりとして排斥し、稀少なのは財貨ではなくして人間の勞働であると稱し、「勞苦」「努力」「不快感」といふ言葉を純粹に心理的に解釋して之を財貨の稀少性の代りに用ひて居る。而して不快感を意味する所の費用（Kosten）と快感を意味する所の效用（Nutzen）との比較に依り其余剩收益（Ertrag）を最大ならしめんとする所の人間の經濟行爲が、貨幣の流通する交換經濟社會に於て、價格形成の現象を齎らすことに爲ると說くのである。リーフマンの言に依れば「交換經濟現象は主觀的價値に溯るのでなく、個人的欲望に溯る可きであり」（註一一）又「經濟理論は……假定せられたる主觀的價値で無く、主觀的欲望に於ける心理に溯るべき」（註一二）なのである。

註一〇　三田學會雜誌二六卷一〇號拙稿參照

註一一　R. Liefmann; Grundsätze des Volkswirtschaftslehre, I. Bd. 3. Aufl. 1923, S. 35.

註一二　Liefmann; a. a. O. S. 35.

心理主義的立場からするリーフマンの限界效用理論排斥、並に之に取つて代れる、其獨特の限界收益說が決して正當に承服し得るものでないことは嘗て說明した通りである。彼は他の價値論無用論者と同樣に結局暗々裡に又は無意識的に限界效用說の助を藉りて居るのであつて、決して、之と離れて獨特の方法で價格現象を說明し得なかつたのである。

然らばゴットルは如何。在來の價値理論の根本的改革の狼火を擧げてより、最近に至るまで、其當初の意思を少しも翻すこと無く、倦まず撓まず其目的貫徹に努力し來つたゴットルに在つては如何、此、ゴットルの價値論排斥の趣旨を批判することが本論文の目的である。

從來の價値論を排斥する大多數の人々に共通である樣に、ゴットルも嘗ては從來の價値論を批判し訂正して之を完成せしめんと努力して反つて之に要する多大の努力と其不毛性とに氣付いた一人であつた。其結果として一體吾人は最初から誤つた問題を取扱つて居るのが其原因ではないかといふ疑問を懷くに至り、其誤謬が、日常の通俗的な價値概念を其儘捉へ來つて之を說明せんとする其出發點其物に在ると考へるに至つたのである。經濟學上常に使用さるゝ既根本的概念に對するゴットルの懷疑的態度は單に「價値」なる概念に止まること無く、汎く經濟學の根本概念一般に擴張され、爲に價値理論のみならず、從來の經濟理論全體に對して信賴を置くことを止めるに至つたのである。ゴットルは「言葉の支配」といふ句を用ひて、在來の經濟學が問題其物を直視しないで徒に空虛な言葉に捉はれて居る次第を述べ、新しき經濟理論の「言葉よりの解放」を叫ぶのである。即ちゴットルに據れば「之まで成長し來たつた所の理論と、此處に說かるゝ理論（即ちゴットルの主張――筆者註）との間に、換言すれば『言葉に捉はれたる』思惟と、問題其物を意識せる思惟との間に、即ち言葉から出發するのと問題から出發するのとの間に、略言すれば言葉の支配と、言葉よりの解放との間には」、（註一三）正に根本的な對立が存在せねばならぬのである。

註一三　Gottl; Bedarf und Deckung, 1928, S. 233.

斯る根本的對立とは當然方法論上の對立を意味するに相違なく、吾人はゴットルの在來の價値論排斥並に彼獨特の經濟的ディメンジョン』（Diewirtschaftliche Dimension）の理論を檢討する前に、簡單乍ら斯樣な對立を主張するに至つた事情を一應知つて置くことが其學說の理解の爲に有益であらうと信ずる。

二　「言葉の支配」

既に述べた如くゴットルの價値論放棄は單純なる價値論放棄ではない。即ち在來の價値理論を放棄することは確にするが、「之まで『價値論』として呼ばれたる經濟學上の領域に相當するあらゆる部分を放棄する譯ではない（註一四）」のである。換言すればゴットルは改めて出發點から出直して價値形成の現象を說明せんと企てるのであるが、其際從來價値理論としての領域に含まれて居つた所のものゝ或部分は當然彼の新しい企圖の中に包括されるのである。

註一四　Gottl; Meine "Ablehnung der Westlehre" in Schriften des Verein f. Sozialpolitik, 183/I. Probleme der Wertlehre. S. 135.

それでは、一體何故に古い「價値」なる名稱を廢して、新しい「經濟的ディメンジョン」なる術語を用ひる必要

があるのか。若しゴットルの所謂る經濟的ディメンジョンの概念が正當に價格形成の現象を說明する資格を有するものであり、然も尙ほ在來の價値理論に含まるゝ經濟學上の領域をそれが包括して居るとすれば、何故此概念こそ眞の價値概念であると敢て誇示することをしないのか。此答は頗る明瞭である。ゴットルに據れば「價値」とか「交換價値」とかいふ言葉は「既に久しく理論的見解の渦卷の中に卷込まれて汚れて仕舞つて居るのである。然るに批判といふことの爲には、先づ事實を正しく事實として理解し、然る後に初て問題として之を觀察することが必要である。それ故に既に理論的混亂の犧牲に落入つて居る或名稱を以て此等の事實を呼ぶことは全く不適當と言ふべきである。斯樣な名稱は、其名付けられたものゝ中へ、有り得べきあらゆる先入觀念を注ぎ込むに相違なく、斯くしては一般的な此理論的混迷から拔け出る最後の可能性まで失はれて仕舞ふ。斯るが故にこそ新造語が必要なのである」（註一五）即ち「經濟的ディメンジョンなる事實に對しては『價値』なる語が本來の呼名であることに疑ひないのである」（註一六）が、之を眞の價値として主張することは反つて混亂を招く基となる許りで理論の解明に盡す所以ではないのである。

註一五　Gottl; Die Wirtschaftliche Dimension, 1923 S. 17.

註一六　Gottl; a. a. O. S. 19.

更に爾餘の價値論無用論と相違する今一つの重要な點は、ゴットルの敵意が單に在來の價値論に對して抱かれる許りでなく「今日尙、吾々の科學に於て理論が組立てられる其組立ての方法全體に對する認識批判的態度と結付いて居る」（註一七）ことである。即ちゴットルの從來の價値學說排斥は、經濟現象一般に對する觀察方法の相違、換言すれば方法論的離反から來て居るのである。此點は吾人がゴットルを研究するに際して銘記して覺えて置かねばならぬことである。

註一七　Gottl; Meine "Ablehungs der Wertlehre"

そこでゴットルの價値論排斥を了解する爲には、更に又、其積極的立論たる經濟的ディメンジョン論を了解する爲には、彼が繰返し〳〵十年一日の如く唱へる「言葉の支配」「言葉よりの解放」なる句の眞意を明にして置く必要がある。

ゴットルは、價値論批判の最初の著書「價値思想」（一八九七年）に於て、「價値に關する學說に於ては、上は其名稱より始つて、殆どあらゆるものが皆論爭の的と爲つて居る」といふツッカーカンドルの一節（註一八）を引用して經濟上の價値論の混沌たる現狀を指摘し、さて斯樣な狀態は抑、何に基くのであるか、それは「恒久的に必然的のものであるか、將た或は之を免れ得るものであるか」（註一九）といふ質問を發する。

註一八　Gottl; "Wertgedanke" in "Wirtschaft als Leben", 1925. S. 4. ゴットルは一八九七年に著した「價値觀念」以下一九二五年に至るまでの多數の論文・册子を集めて、新に Wirtschaft als Leben なる標題の下に之を刊行した。に附した頁番號は此合册本のである。

註一九　Gottl; a. a. O. S. 12.

ゴットルは之に答へて、縱令ひ歷史的に變化があり地理的に場所が變つても、今日の多數の價値論の間に存する矛盾は解き切きれぬと考へる。それは今日の價値論が既に其論理的前提に於て無反省な誤謬を犯して居るからではないかといふ。此誤謬を除かぬ限り價値理論の完成は望まれぬ。然らば此誤謬は何であるかといふに、それは幾多の價値論が『價値』といふ名稱の下に、唯一のものとして、各人に取つて全然同一のものとして決定して仕舞つたと思はれて居る所の或對象を考へて居る」（註二〇）といふことであると說く。

註二〇　Gottl; a. a. O. S. 22.

然も「價値論」に關して提出せる此疑問をばゴットルは啻に價値論のみに限らず、廣く經濟學の根本概念一般に掛けて居つたのである。價値思想に關する研究は、ゴットルに在つては此疑問を證據立てる爲の例の一つに過ぎなかつたのである。

「價値思想」に次いで著した書「言葉の支配」（註二二）に於てゴットルは經濟學上の根本概念の曖昧を論じ、それが個人々々に依つて使方や意味の相違することを說き、その理由は言葉が科學的精練を受けることなく、日常用語其儘で、經濟學上の議論に利用されることに在るのであると斷ずる。即ちゴットルの言葉に據れば「此等の言葉は總て皆經濟學上の專問語であり、然も專問語として該科學の中に初て出現したもので無く、既に該科學と同時に存在するものなのである。」（註二三）

註二一　Gottl; Die Herrschaft des Wortes. Untersuchungen zur Kritik des nationalökonomischen Denkens. 1901.

註二二　Gottl; a. a. O. S. 97.

斯樣な意味に於てゴットルは在來の經濟學に於ける「言葉の支配」「言葉に捉はれたる思惟」を指摘せんと努力める。最初に價値思想を捉へ來つて此問題を論じたのである。其次第を此處に詳論する餘裕なきを遺憾とするが、彼が結局に得たる結論は當初の疑問を解決するものであつた。即ち、價値なる言葉は根本概念の一つとして、爾餘の所謂る根本概念と全く同樣に、人に依つてそれ〴〵解釋を異にする所の多種多樣の方面に使用されて居る、經濟學上に於ては恰も單一且つ同一の對象を意味するかの如く假定されて居るが、現實に於ては其反對である所の一概念であるといふ結論であつた。價値學說を唱へる人は價値なる單一の言葉の下に單一の事柄が意味せらるゝものと考へ、其が爲に反つて數多くの矛盾が生じた、在來の價値論の單一性は即ち單に外見上のものに過ぎず、眞の價値論の現狀は希望なき混沌の中に在るものと言はねばならぬのである。

斯くの如き論據の上に立つてゴットルは自己の積極的議論を進めんとする。從つて次に彼の積極的議論就中其議論の出發點たる彼の方法論上の立場を理解することが吾人に與へられる課題であるが、其前に一應果して彼の從來の經濟理論に於ける「言葉の支配」といふことが適切であるか何うかを知らねばならぬ。

先づ第一に何人に依つても容易に指摘せらるゝことは、ゴットルの主張なり論證なりが經驗的基礎の上に立つて居るといふことである。經驗的證明といふことは、唯或事實が經驗せられ確定せらるゝ限りに於て其事實のみに當嵌ることである。從つて弘く一般的に其論證を適用することは許されぬ。然るにゴットルの批判は在來の經濟學一般の上に向けられて居る。其故に其判斷は當然漠然として、確固たる基礎を欠き、極めて總括的なものに爲らざるを得ない。換言すればゴットルの批判は一般的であるが、一般的であるが故に絕對的なものではないのである。確にゴットルの所言が當嵌る場合も在るであらう。が併し如何なる場合にも、經濟學は言葉に拘束されて居つたとは斷言し得ないのである。經濟學が決して言葉に捉はれず、明に問題を意識し言葉を弄ぶことなく問題を解決せんとして居る場合を擧げることは容易であらう。

例へばゴットルが直接の對象として捉へ來つた價値論に就て觀やう。或一部の限界效用學派の說や或は又リーフマン等に於て見らるゝ如く、效用なる觀念を數量的に計算し得るものゝ如く考へ、或は之を加減し或は乘除したりすることに依つて價値を說明せんとする企ては、ゴットルも指摘して居る樣に言葉に捉はれたる思惟と見ることが出來るであらう。が斯樣な一事例からして價値論全體が或は又經濟學上の全根本概念論が何れも皆言葉に支配されて居ると斷言することは許されぬ。正に價値論の領域に於てさへ、ベーム・バヴェルクの言ふ通り、「種々なる價値

論が其眼前に置き得た所の其研究對象の極端な多樣性にも拘らず、此對象の中の或部分が總ての理論に共通であるといふこと……が現實の事情である樣に見受けられるのである。其最も重大、最も確實なる點を指摘すれば、あらゆる價値理論家は色々な名稱の下に商品交換の事實と其數量的關係を說明する爲に努力して居るのである。少くとも此共通の部分に關して、種々なる價値理論が必然的に相爭ひ、之よりして確にゴットルが必要以上だと驚嘆せる『總てのものに對する總てのもの〻鬪爭』が發生するのである。」（註二三）

註二三　Böhm-Bawerk; Vom Gegenstand der Wertlehre 1898, in Gesammelte Schriften, S. 307-308.

限界效用學派の如きは明に此目的を意識し心理的主觀的なる價値評定の事實を捉へ、問題の實在を明に意識し其努力せるもの〻一つであるに相違ない。

之を要するにゴットルの所說には、一つの實質的な內在的價値學說明批判もないことが根本的缺陷である。「在來の價値論」に對するゴットルの批判は全く形式的表面的である。彼には在來の經濟理論に對する否定的態度から、一歩進んで肯定的段階へ發展する爲の內部的用意が欠けて居る。從つて在來の價値論に對するゴットルの不平は、其儘ゴットルに對する吾人の不平となすことが出來る。言葉を弄ぶものは寧ろゴットル自身ではないかと。在來の價値論に於ては其概念が論ぜられずして單なる言葉が論ぜられて居るといふ證明をば、ゴットルは其概念の分析に依つて示さず、「價値」と呼ばれる名稱を分析して以て滿足して居る。ゴットルが從來の經濟學に於て使用されて居る幾多の用語の代りの、彼獨特の無數の新造語は、彼の著書を開くものに取つて徒らに苦痛困難の種と爲るのみである。彼の著書の難解、煩雜、其用語の有害無益は彼を讀む總ての學者の定評である。（註二四）

註二四　例へばハーベルラーは曰く「ゴットルは、僅少の言葉の代りに多數の言葉を置き換へるならば言葉の支配から免れると眞面目に信じて居るのである。彼は一見多數の言葉の支配が相殺され排除されると考へて居るが、果して、之が爲に反つて其支配は確實にされ鞏固にされては居らぬであらうか」と。Gottfried Harberler; Wirtschaft als Leben, Kritische Bemerkungen zu Gottls methodologischen Schriften, in Zeitschrift f. Nationalökonomie. 1. Bd. S. 38.

又バックは曰く「ゴットル自身は……日常の事柄を通常の意味と形式とに於て說き且つ述べることを避けた。彼は獨特の呼名を創造し日常の言葉で間に合せぬ樣に努めた。日常用語の代りに一層適切且つ決定的な表現を見出し得ぬ時は譬喩や模型の形式で意見を表現せんと試みた。此形式はゴットルの研究を援けたといふより寧ろ大に害したと確言することが出來る」と。（Josef Back; Der Streit um die nationalökonomischen Wertlehre mit besonderer Berücksichtigung Gottls, Jena 1926. S. 77.

モェラーは又曰く「……更に原著者（ゴットル）が說く許多の事柄は其意味不明瞭であつて、多くの事柄は骨を折つて、異つた意味に解釋されて仕舞ふ」と。Hero Moeller; Die Wirtschaftliche Dimension, in Schmollers Jahrbuch. 47. Jahrg. S. 282.

アモンは曰く「實際の問題に就てはゴットルは少しも說く所がない。若しゴットルが最初に吾々の科學の根底に横る所の問題を設置し、而して其背後に存する事實を分析し、其中に含まれて居る概念を確定したならば、彼は決して單なる亡想又は穿鑿に迷ふことなく、其勞作は疑も無く益々有益なものと爲り、價値多き認識を齎らし得たであらう。是に由つて觀れば、彼は吾人が『在來の』科學又は『在來の』理論を全く輕蔑し、智識上のロビンソン・クルーソーを演ぜんとする場合に如何なる結果に到達するかの一例を提供したのである」と。（Alfred Amonn; „Wert" oder „Wirtschaftliche Dimension" in Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik. 59. Bd. S.

265.）

シュトレラーは曰く「ゴットルは『言葉』に對して彼自ら進んで是認せる不信用にも拘らず、……言葉否な概念の名稱の變更といふことに其主要な注意を注ぎ込んだ。彼は概念の名稱を辨證法的に變へることに依つて新しい問題に到達すると考へたのである蓋し、彼に於ては新しい名稱は新しい問題を意味したからである。從つて研究は問題から出發せずして概念の名稱から出發する。其研究の直接の結果は概念に確固たる內容を與へることでは無くして言葉の解釋である。」と。（Rudolf Streller; Unter der Herrschaft des Wortes, in Zeitschrift f. die gesamte. Staatswissenschaften. 88 Bd. S. 65.）

又フォーゲルは曰く「而して『生活としての經濟』は頗る不明瞭である、蓋し、人々は、一文々々ゴットル自ら選定せる新規の術語をば、通俗的な、又は科學的に從來普通に使用せられて居る經濟專門語に飜譯せねばならぬからである。而して幾多の努力を支拂つた後に、其所說は元々全根本的に新しいものでは全く無いといふ結果に到達するのである。（Emmanuel Hugo Vogel; Die objektivischen Preistheorien, in Zeitschrift f. d. gesamte Staatswissenschaften, 30. Bd. 1931. S. 269.）

シュトレラーはゴットルの近著、"Bedarf und Deckung" 中の資本利子論の一節を引用し、ゴットルがベーム・バヴェルク流の資本利子論を稱へて居りながら、資本財なる用語を避けて、Rüstgut, Fugmacht, Fernfugmacht 等の新造語に依つて同じ說明を爲せる煩雜と理解の困難とを指摘して居る。（註二五）而して斷言して曰く「……確に二、三の著者に對しては、理論から出發しないで言葉から出發して居るといふ非難を擧げることが出來るし又擧げねばならぬが、――不幸なことには――ゴットル自身が此種の著者に屬するものである。」（註二六）と。

註二五　Rudolf Streller; Unter der Herrschaft des Wortes S. 45.

註二六　R. Streller; a. a. O. S. 44.

ハーベルラーは又ゴットルの二番目の著書『Herrschaft des Wortes" の後編より、彼が經濟の意味を說明する箇所を引用して、シュトレーラーと同樣の趣旨を述べて居る。即ちゴットルに據れば「日常生活の行爲の第一の根本的關係は、『吾人の能力（Können）が吾人の意欲（Wollen）と並行せぬ點に存する。……この結果として或一つの努力は他の或努力の效果を何等かの方法に於て中止せしめなければ之を遂行するを得ぬことに爲る。即ち此處に一つの根本的關係、缺乏（Not）といふ根本關係が支配するのである』（Gottl; a. a. O. S. 116）然るに、吾人は平素財貨が需要に比して不足して居る、故に人間は此財貨を何か適當に處分せねばならぬといふ丈けで以て斯る事情を表現するのが常である。新規な表現方法の利益は何處に存するのか明瞭でない」（註二七）と。或は又ゴットルが各種財貨に對する人々の價値計算をば、長々しい說明の後に行爲に於ける選擇の決意（"Wahlentscheidung im Handeln）と呼び變へて居るが、ハーベルラーは之を指して曰く、一體此概念は「限界效用說の著書に於て述べられる價値計算と同じではないか。其差異は何處に在る。問題に有るのではなく、言葉にのみあるのだ」（註二八）と。誠に其通りであらう。

註二七　G. Haberler; Wirtschaft als Leben, S. 37.

註二八　a. a. O. S. 38.

是まで述べ來つた所に依つて、吾人は在來の價値論に對するゴットルの批判が如何なるものであるか、又其論據が不充分であり、其結論が不當なものであることを簡單ながら明にした。此等のことを了解して、吾人は次にゴットルの積極的議論へ進まねばならぬ。ゴットルの消極的批判が不當であるといふことは必しも其積極的理論が最初から誤つて居ることを意味するものでない。或立論を企るに至つた動機が不當であるからと言つて、其立論其物が

不當であるとは云へぬ。が併し、ゴットルの場合に、其全く新しい計畫が結局、アモンの所謂る智識上のロビンソンクルーソー」であり、「經濟學上の認識を深めるよりは寧ろ妨げるに役立つ」に過ぎぬ結果に落入ることは之を推察するに難く無い。

三　「生活としての經濟」

先づ最初に、彼の價値理論即ち經濟的ディメンジォン理論が據つて立つ其基礎を明にせねばならぬ。

其基礎は、一言にして言へば「生活としての經濟」である。「生活としての經濟」とは何か、「在來の經濟學」の基礎と如何に異るのか。

ゴットルの經濟學研究は、哲學上の方面に於てディルタイの體驗主義の影響の下にあり、フッサールの現象學に有力な援助を得て居ると言はれて居るが、此處に、彼の經濟的ディメンジォン論を研究する限りに於ては哲學上の此方面まで探求する必要はないと思ふ。（註二九）

註二九　此方面に於てゴットルの思想發展の經過に附き詳細な研究を爲したのは、ヨゼフ・バックであらう。此方面の研究者は須く其著 „Der Streit um die nationalökonomische Wertlehre mit besonderer Berücksichtigung Gottls, Jena, 1923. 233 S. を參照せられたい。

生活としての經濟とは、換言すれば經濟はそれ自身生活であるといふことである。といふのは反面に於て給付としての經濟學に反對することを意味する。ゴットルが最初に經濟學の內容を說明しやうと試みたのは其著「言葉の支配」の後編に於てである。其處で彼は經濟學が行爲の世界を取扱ふものであることを述べる。行爲とは如何なる行爲か。それは日常生起する行爲を意味するといふ。併し之は頗る漠然たる定義であるが、より以上に明瞭に其內容を規定しない。此處で言はんと欲したことは、經濟學を精神科學として基礎付け、自然科學的方法を排斥することであつた。行爲の世界、體驗の世界には分裂せざる確固たる關係が存在して居る、此關係は自然科學に於けるが如く抽象、孤立化等の方法に依つては到底正しく解し得ぬものであり、唯、之を全體として觀察し、行爲の世界を其儘全體として理解することに依つてのみ吾人は吾人の現實を了解することが出來るといふのがゴットルの根本的主張である。

其故にゴットルの基礎は抽象を排すること、經驗其物に立脚すること、全體として觀察することに在ると言へる。斯樣な立場からしてゴットルは經濟學を Allwirtschaftslehre 全體的經濟學と名付けて居る。其重點は經驗に置かれる「吾々の科學に於ては、これまで、理論と經驗との間の密接な關係がすつかり缺けて居る。」（註三〇）此關係の缺如こそは、ゴットルに據れば、リカードオ以來の理論――殊に再近では限界效用學派――が「科學的に確立せられたる事實の道程にある經驗から生れ出なかつた」（註三一）理由なのである。

註三〇　三一　Gottl; a. a. O. S. 605, 609.

此等の學說は通俗的なる經驗其物から生れたるが故に、財貨論に終り（註三二）『經驗』との關係を失へる所の「生活と離れた理論」（註三三）となり言葉に拘束せられたる思惟と化するのである。

註三二　三三　Gottl; a. a. O. S. 646, 648.

之に反し全體的經濟學は言葉からでなく問題から出發する。問題から出發するとは即ち經濟を生活として解釋することである。然らば經濟の本質は何處に存するのか。曰く「生活としての經濟とは欲望と滿足との永久的一致を眼目とせる人間の共同生活體である」（註三四）と。

註三四　Gottl; a. a. O. S. 713.

即ちゴットルに依れば經濟的生活は、欲望と滿足とを一致させることに基礎を置く、欲望と滿足との間に一致を缺くが如き共同生活體は有り得ぬといふのがゴットルの內心に潛む根本思想である。生活は稀少性（ゴットルの用語に據れば缺乏（Not））といふ根本的關係に支配されて置る。此缺乏を脫出せんとする所に經濟なる事情が生れる。生活上の缺乏が即ち經濟の內容を決定するのであるが、それと同時に經濟は個々の行爲として存在するものでなく、存在全體に結び付いて居るものでなければならぬ。「人間は消費とか或は生產の意味に於ける勞働とかに依つて經濟を營むものではない。例へば人が耕作を行ふといふこと丈けに依つて其人が經濟を行ふ譯ではない。其耕作を行ふか何うか、又何の範圍まで之を行ふ可きかを考慮し此等に就て注意深く選擇して決定する、此事が經濟の方向を定めることに爲るのである、經濟とは、決して個々の行動の內部に存在する樣な行爲ではない」（註三五）。經濟を主觀的に解すれば「欲望と滿足との一致に關して細心に行はれる注意」であり、客觀的に之を解すれば「欲望と處分との一定領域の內部に於ける欲望滿足のあらゆる行爲が統一性と永續性とに調和せられたる關係」（註三六）を意味する。と言ふことが出來る。

註三五　三六　Gottl; Wirtschaft und Technik, im G. d. s. II Abt. S. 212. u. S. 213.

ゴットルの說く「生活としての經濟」とは大體以上の如きものである。「欲望と滿足の一致」といふことに關してより以上詳細なる說明は之をゴットルに得ることが出來ぬ。

經濟を生活として解する經濟學が即ちゴットルの所謂る全體的經濟學である。それは財貨論に對抗するものなのである。全體的經濟學の採用する方法は、當然又ゴットルが名付けて「社會學的方法」（註三七）と稱する所のものでなければならぬ。社會學的方法とは即ち先づ諸種の社會科學が孤立化せられ、獨立化せらるゝことを排斥し相互相援け合つて進むことを意味する。更に又個々の社會科學の內部に在つて如何なる對象と雖も孤立化せられ、原子論的に觀察せらるゝことを排斥する。即ち積極的に此方法は個々の經濟現象並に行爲が經濟學に依り其全體の關係に於て觀察せられ、且つ記述せらる可きことを要求するものである。換言すれば、「全體的經濟學は孤立化的抽象の方法、法則の樹立等を知らざるものであり、寧ろ生活の全體的關係に於いて、一つの社會現象として、經濟を把握せんと努めるものであるのである」（註三八）。

註三七　Gottl; a. a. O. S. 628 ff. Soziologische Zusammenhänge 參照

註三八　J. Back; a. a. O. S. 139.

「生活としての經濟」を簡單に說明すれば以上の如くである。

斯くの如き方法論的論據に立つてゴットルは其經濟的ディメンジオン論を展開する。之を吟味するのが吾々の本來の課題である。

四　「經濟的ディメンジオン」

從來價値論が占めて居つた領域の或部分を共有し、其名稱に於て全く之を排除して新に輸入せられたる此經濟的ディメンジオンとは一體何物であるか。如何なる事實に附せられたる概念であるか。ゴットルは先づ經濟的ディメンジオンなる言葉の說明を以て始める。

經濟的ディメンジオンとは一つの事實である（註三九）とされ、「客體に結び付いて居る所の經濟的に特質ある數」であつて、「常に妥當して居る大さの意味を持つて居るもの」（註四〇）とされる。此形式的定義に依つて、我々は經濟

的ディメンジォンが或數であるといふことを了解する。「經濟的に特質ある」とは何か「妥當する大さ」とは何か。

註三九　Gottl; Die Wirtschaftliche Dimension, 1925. S. 9, 16.

註四〇　Gottl; a. a. O. S. 17.

ゴットルに據れば「經濟的に特質ある數」といふのは、人間の經濟行爲の客體が其經濟から與へられるものであり、又それが經濟に對して有する意味を數的に表現したものである。それは恰度此等の客體が一定の長さ又は重さ、又温度又は年齢等を帶びて居るのと同樣の關係にあるものと言へる（註四一）のであると說く。

註四一　Gottl; a. a. O. S. 17.

「或客體は常に妥當する大さの意味を有する所の、經濟的に特質ある或數をば、經濟に對する其關係に應じて有する。」が此「數」は一噸の鐵、一尺の布といふ場合の自然科學的概念と「全然異らぬ」（註四二）といふ。

註四二　Gottl; a. a. O. S. 17.

在來の價値概念に相當すべき社會科學上の概念たる經濟的ディメンジォンが、長さとか重さとかいふ物體に個有な客觀的、絶對的概念であり得るであらうか。吾々は更に進んで「經濟的に特質ある數」の正體を突止めねばならぬ。單なる言葉の譬喩は決してディメンジォンの本質を明にせぬ。反つて曖昧を齎すに役立つのみである。

曩に述べた通り經濟的ディメンジォンは從來價値と呼ばれて來た概念に代るものである。價値なる語を用ひることは、先入觀念と偏見とに災されて事實に對する正しい認識を失ふ恐れがあるといふのが之を用ひない理由であつた。然らば「價格」なる語は如何といふに、ゴットルは表面上之を其儘採用して居る。但し其意味する所の內容は必しも從來の價格概念と一致して居る譯ではない。ゴットルは此「價格」と「經濟的ディメンジォン」とを比較し、區別を定めることに依つて經濟的ディメンジォンの意味する「數」の性質を明にせんとする。

ゴットルが正しく述べる通り價値の概念も價格の概念も或物と或物とが交換される場合に生れて來る觀念である。此交換に於ては、其が行はれる每に必ず其物の、或一定量が他の物の一定量と交換されるのである。而してゴットルの言ふ經濟的ディメンジォンと價格とは何れも此相交換される數量に關聯せる概念である。即ち價格とは「交換の行はれる個々の場合每に組合せられる數量」「個々の場合每に交換され合ふ數量の關係」換言すれば現實に支拂はれる價格」（註四三）を意味する。之に對し經濟的ディメンジォンは「不斷に妥當する意味を持つ數」であつて、日常の用語に於ては價値と呼ばれて居る所のものなのである。斯る「數」を帶びたる或財貨が現實に交換されると其物に「價格」といふ數が與へられることに爲るのである。

註四三　Gottl; a. a. O. S. 20.

此二つの「數」の間に如何なる關係があるか。「個々の價格は場合々々に實現されたる或もの、既に嘗て存在して居つたもの、過去に外ならぬものである」。之に對し經濟的ディメンジォンは或客體の「特質ある數」、「常に妥當する或もの」、「現在に外ならぬもの」である。「價格は交換の行爲と共に生起する、それは行爲に依りて定めらるゝ或もの〻一つの事實である。」「之に反し經濟的ディメンジォンは、一定の客體に附著するものであるが、幾多の事實が交互に起る其基の一つの事情に等しい。時の異るにつれて經濟的ディメンジォンは其地位を變へ、或は上り或は下る。それは、價格に迄溯らされる限りに於て、行爲に依りて決定せらるゝものであるが、それと共に、例へば爾後の交換現象に對する場合の如きは、それは間接に意思を決定するものである」是に由つて觀れば價格は經濟的ディメンジォンを通じて實現されるもの〻如くである。が兩者の關係は必しも斯く一方的ではないのである。「併しなが

ら、最も新しい價格、即ち最後に支拂はれたる價格は決して單なる事實ではなく、同時に次に續く交換に對しては間接に意思を決定するものであり得る。……此最新の價格狀態が唯單に經濟的ディメンジォンに對して强い影響を與へる許りで無く、直接に之を代表して居るかの如く見受られる限り、價格は常に、嘗て存在せるものゝ儘の姿を續ける。然る時此場合の價格は其高さに應じて直接に意思を決定する所の經濟的ディメンジォンに、轉換するのである。」即ち一面に於て價格が經濟的ディメンジォンに影響を與へることが認められる。此關係は價格を「人格的のもの」經濟的デメィンジォンを「超人格的なもの」と見る考へに於て一層明瞭となる即ち「價格は常に或人格的なものである、それは行爲に依存し、行爲は交換への決意といふ意味に於て一人格に依存する。此決意は常に必然的に價格に對する決意を含むものである。……然るに經濟的ディメンジォンは、それが價格に溯る限りに於て、人格的なものから生れる。がそれは又交換するものゝ意思を決定する限りに於て、人格的なものに影響を與へる。併しそれ自體は人格から解放せられ、一人格以上に昇り、此意味に於て超人格的なものを意味する。此事は單に存在したものとしての價格には決して當嵌るものでなく、常に妥當するものとしての經濟的ディメンジォンにのみ當嵌る」（註四四）。

註四四　Gottl; a. a. O. S. 50.

長々しい此說明は、經濟的ディメンジォンと名付けらるゝ事實に對して明白な概念を形成して居らぬ。明なことはそれが現實的價格に非ざる或觀念上の數を指すものだといふこと丈けである。常に妥當するといふことの根據は全く明瞭でない。

ゴットルの說明は更に續く。經濟的ディメンジォンは一方に於て、『計算としての經濟』に於て、あらゆる見積の標準として作用する。經濟に於けるあらゆる計算に對してそれは規準を提供する。」他方に於て經濟的ディメンジォンは「市場に對し、行はれ得るあらゆる交換の綜合概念と見られる。即ちそれは其價格に對する、基礎付けられたる期待、いはゞ價格希望（Preishoffnung）としての資格がある。」（註四五）更に又「經濟的ディメンジォンは交換に對する決意が必然的に或價格に對する決意を包含する限りに於て、亦交換の意思を決定することに爲る。』がそれは交換の基礎を爲すのではなく、交換が行はれる其條件の幾分漠然たる範圍を指示するものに過ぎぬ。」（註四六）「經濟的ディメンジォンが幾分漠然たる條件を構成するといふことはそれがその條件構成の程度に應じて價格をも貫徹して居ることに爲る。從つてそれは發生する價格狀態を決定する規範となる。」（註四七）。

註四五　Gottl; a. a. O. S. 21.

註四六　Gottl; a. a. O. S. 21.

註四七　Gottl; a. a. O. S. 23.

交換に對し「幾分漠然たる條件」であり同時に又「之を決定する所の規範」であるとは一體何を意味するのか。「條件構成の程度に應じて」とは何を意味するのか。其自身價格に依つて影響されるものが何の程度まで「見積りの標準」として役立つのであるか。一切が不明である。

ゴットルは更に別の言葉を以て經濟的ディメンジォンの職分を說明する。「經濟的ディメンジォンは價格の過去と價格の將來との間に架せられたる橋の如きものである。」價格の過去と將來との間を割いて居るものは明に「交換當事者の意識の中に存在して居る所の『交換並に價格に對する決意』である」（註四八）此決意に對して基礎を與へるものは經濟的ディメンジォンに外ならぬ。

註四八　Gottl; a. a. O. S. 23.

斯様な説明は吾人をして當然「效用」又は「價値」の觀念を思出させずには置かぬ。吾人は諸種の財貨に對して或相對的高度の效用を認め、之に從つて交換を行ふ。之と上記のゴットルの説明と何處に根本的な相違があるのか。

ゴットルは斯る疑問の當然發生すべきを豫期したるものゝ如く、直に之に答へて居る、「價格が誤なく、交換當事者の決意から生ずるといふ此見解の背後には重大なる誤謬の危險が待構へて居る」（註四九）此誤謬とは取りも直さず「價値」とか「效用」とかいふ言葉を使つて言葉の支配さるゝに至る危險に陷ることを指すものである。

註四九　Gottl; a. a. O. S. 24.

ゴットルの考に據ると、先づ交換（Tausch）と選擇（Wohl）とは區別せねばならぬ概念なのである。日常語に捉はれたる限界效用説の如きは此兩者を混用して居る。財貨が彼我取引される場合に一つの選擇が行はれる、其際に價値といふ概念が利用され、或物は他の物より大なる價値、高き價値を持つといふことが言はれる、ゴットルに依れば之は選擇であつて交換ではないのである。「交換は表面的に考察すれば選擇に類似して見える。經濟が本來原子論的に單なる行爲に分解されるものと見る人は、……總ての經濟的行爲を交換と見る、例へば、生産をば費用と結果との間の內部的交換と見るであらう。然る時は如何なる交換と雖も、一つの選擇として單純化されて觀察される」（註五〇）「交換は……選擇として一般に解釋せらるゝものと雲泥の相違がある。……交換を爲すべきか否か、又如何に之を行ふべきか一切の事柄は、全體に對する其關係に依つて支配される」（註五一）。

註五〇　Gottl; a. a. O. S. 11.

註五一　Gottl; a. a. O. S. 13.

「之を要するに交換と選擇の區別とはゴットルと限界效用説との方法論上の相違から生れて來たものゝ如くである。ゴットルに依れば此區別を無視することは「客體の直接に數量的なる評價を可能ならしめ、」「積極的なる效用の大さの表」に賴る誤を犯さしめ、（註五二）あらゆるものゝあらゆるものに對する關係の存在する」を無視せしめ、「單なる行爲の寄集め細工」（註五三）を齎らす結果に陷るのである。

註五二　Gottl; a. a. O. S. 24.

註五三　Gottl; a. a. O. S. 25.

果してゴットルの考へて居る通りであらうか。限界效用説は經濟を以て個々の行爲の寄集めと解釋して居るであらうか。選擇を以て「直接に數量的なる評價」と解して居るであらうか。少くとも方法論的に進步せる最近の限界效用説に在つてはゴットルの斯様な解釋は全然不當である。ゴットルのいふ「交換」と「選擇」の間には雲泥の差などは決して存在しない。全體との關係に於ける經濟行爲を全く無視するが如き解釋は效用説の採る所では勿論無く、又今日一般に行はれて居る所でもない。

ゴットルの此曲解は、實に彼の爲に不幸であつた。斯くの如き誤信は難解なる彼の新語製造に役立つのみであつた。之に關する詳論は姑く措く。

さて、斯くの如き職分を有する此經濟的ディメンジョンは如何にして發生するのか、「經濟的ディメンジョンは……其根源を市場に得る。」而して「市場とは、……實現せらるゝ交換の綜合概念に過ぎぬ」、市場に於ては過去の價格列が將來の價格列と織り交ぜられる。「價格の過去は、それが多少なりとも價格の將來に對して影響を與へる限りに於て、之に織り込まれる。市場を通じて行はれる價格の此織込みが正しく、經濟的ディメンジョンの中に於て具

象化されるのである。價格に依つて決定されると同時に價格を決定するものであること、之が經濟的ディメンジォンの意味である。」（註五四）。

註五四　Gottl; a. a. O. S. 26.

此文章の意味は正にアモンの指摘して居る通り明瞭でない。「價格の過去は其將來に影響を與へる」。之が、織り込みと名付けられる。然も此織込は價格の將來に非ざる、「經濟的ディメンジォンなるものに具象化される。此經濟的ディメンジォンが價格の將來に影響を與へる。して見れば、價格の織込みとは將來の價格に直接影響を與へることでなくして經濟的ディメンジォンを作り出すといふ意味に外ならなくなる。（註五五）。

註五五　A. Amonn; a. a. O. S. 242. 參照

「價格が經濟的ディメンジォンの中へ織込まれる」とは具體的に何を意味するか。ゴットル自身の言葉に依ればそれは、「經濟當事者の頭腦中に活動し、彼等の意思の中に生きて居る」といふことである。是に據つて見れば經濟的ディメンジォンとは或心理的事實である、人間の心理的動機を表現する或表象の如く解される。然りとすれば、正にアモンの指摘する如く（註五六）長さ重さ、温度年齢等の如く客體其物に固有な或ディメンジォンではあり得なく爲る。此處にも經濟的ディメンジォンの正體を曖昧ならしむる矛盾がある。

註五六　Amonn; a. a. O. S. 243.

斯くの如く、市場より實現され得る交換の綜合概念として發生する經濟的ディメンジォンは、價格を決定する規範であり、交換並に價格への決意に參加する多數諸種の要素中の中心的な勢力である。あらゆる價格列は皆此經濟的ディメンジォンの中に歸屬せられる。換言すれば經濟的ディメンジォンは個々の價格狀態に對立するものとして價格繼續性を現す。此點に於て經濟的ディメンジォンは「古き價格狀態に應じて新しき價格狀態を整頓する爲の缺く可からざる支柱を提供するものとなる」。（註五七）然るに既に知れる如く、個々の價格狀態は經濟的ディメンジォンに對して影響を與へるものである。然も、ゴットルに依れば「新しい價格狀態は比較的に高く上昇したり、或は頗る深く低下することがある。此事實は何れも取りも直さず經濟的ディメンジォンの規定的規範から離反する意味に外ならぬ。日常用語に依れば、之は『價格』が低落したとか騰貴したとかいふ言葉に依つて表現される。……規定的規範は謂はゞ强大なる勢力の壓迫の下に屈曲せられることに爲る」（註五八）と。

註五七　Gottl; a. a. O. S. 28.

註五八　Gottl; a. a. O. S. 30.

由是觀之、經濟的ディメンジォンは、一方に於て價格の將來を規定する所の規範であるが、他方に於て、「價格の過去の全系列に依つて影響されるもの」であり、「價格の幾分漠然たる條件」であり「價格狀態に依つて屈曲せらるゝもの」である。然も新なる價格狀態は此規範から遙に離れて上下することが出來るのである。ゴットルは一體「規範」といふことを如何に解して居るのであらうか。斯樣に正面から相矛盾する性質を兼ね備へたる經濟的ディメンジォンの本質は吾人の到底了解し得ぬ所である。

ゴットルは、經濟的ディメンジォンが價格の過去の綜合概念であると考へることに依つて、從來の價値論が價格決定の根本原因を追求せることの誤を指摘せんと欲したものゝ如くである。即ち「經濟的ディメンジォンは根本的には其自體價格に溯るものなるが故に、それは價格に對して決して充分なる根據を演ずるものでなく、規定的規範としての其役割は、價格の一切の關係を覆ふ所の假面を表すに過ぎぬものである。其故に簡單な標語を以て之を現、

せば「經濟的ディメンジョンは『價格全體の結果』と言へる。」（註五九）之に對して從來の價値論は「價格全體の根據」を求めたものと言ふことが出來る。ゴットルに據れば「價値論の『死亡』は先づ第一に『價格全體の根據』に對する此追求に關係がある」（註六〇）のである。

註五九　Gottl; a. a. O. S. 31.

註六〇　Gottl; a. a. O. S. 32.

經濟的ディメンジョンが「規定的規範」といふ積極的職分を持つものでありながら、單なる「假面」即ち表面的假象に過ぎぬといふのは全く解釋に苦しむ説明である。又、それは措くとしても、上述の如き經濟的ディメンジョンの職分のみを以て、果して從來の價値論の要求を非難する資格があるであらうか。ゴットルが經濟的ディメンジョンに依つて説明したことは、或價格の成立が過去の價格全體の影響を受けるといふこと、即ち個々の價格が獨立に當該物件に對する評價に依つて決定せられるのではなく、或物の價格の形成は他の全價格列の影響の下に行はれるといふことに外ならぬ。併しながら、斯る事情は最近の經濟的平衡論が明に認め、又力を込めて唱導して居る所である。カッセルの説く價格形成の數學的表明は其代表的なものである。同じ價値無用論者バローネが、「價値の根據を訊ねることは無意味な質問である。價値には一つの根據といふものは無い。價値、一層適切に言へば價格なるものは經濟的平衡を決定するあらゆる條件から生ずる。總てが相共同して總ての交換關係（バローネは價値の概念を斯く呼び變へる――筆者註）を決定する」（註六一）と説く簡單明瞭な其主張は不可解なる經濟的ディメンジョンの概念を輸入し、數十頁を費して説いたゴットルの説と同一の内容を意味するものなのでなからうか。然りとすれば、吾々は之に答へる爲に經濟的平衡論よりする價値學説無用論を論議する必要に迫られるが、それに就ては爰に第一節に言及した所であるし、此處に於て詳論することは不適當である。蓋しゴットルは從來のあらゆる經濟理論に不信用を表明して自己獨特の經濟學説を創立することに努めて居るのであるが、本論文の目的はゴットルの此意圖の一面たる價値理論に就て其正體を明にして之を批判することに在るものであるからである。ゴットルの説の煩雜と曖昧と内的矛盾とにも拘らず、それの本質は經濟的平衡論に在ると斷定を下す前に、尙ほゴットルの所言を聞かう。

註六一　Barone; Grundzüge der theoretischen nationalökonomie. S. 42.

次にゴットルは經濟的ディメンジョンの現れ方として「通常の價値位置」「場合々々の價値の高度」及び「計算せられたる或大さ」の三種を述べて居る。其第一のものは日常語で「價値」と呼ばれ、第二のものは「其日々々の價格」に當り最後のものは「收益價値」に相當すると説くが此等の詳細なる説明は少しも經濟的ディメンジョンの本質を明ならしむるに役立たぬ。

以上がゴットルの著「經濟的ディメンジョン」中、「經濟的ディメンジョンの事實」と題する第二章の略述である。第三章は「經濟的ディメンジョンの發生」と題する。「經濟的ディメンジョンは如何なる生成過程を取るか、交換は豫め如何なる根源を持つか」（註六二）といふ質問を起してゴットルは此章を説き始める。

註六二　Gottl; a. a. O. S. 46.

吾々は上述せる所に於て、ゴットル自身の言葉に依り朧氣ながら經濟的ディメンジョンの意味と其職分とを推定した。併しながら其本質、即ち「經濟的に特質ある數」とは何を意味するのか、又縱令ひ此「數」が「全價格の結果」として發生するとしても、其（相對的又は絶對的）大さは如何にして定まるかに就ては全然之を推定し得なかつた。

「經濟的ディメンジョンの成生」を論ずる章に於て、吾人は此疑問に對して何等かの解答を期待してもよい筈である。

ゴットルに依れば、經濟的ディメンジョンは、貨幣の流通する交換經濟社會に於てのみ發生する。例へば人類の初期の社會生活の如き狀態の假定の下に於ては、交換は唯例外的に行はれるに過ぎぬ。財貨の交換は、各民族間に於て、侵害に對する同態復讐の制度が賠償の制度へ移り、其間に各氏族特有の財貨に慢性的過剩の存在するといふ條件が備ると發展して來るのである。此際交換される目的物の種類及び分量は唯、偶然又は習慣に依つて決定されて居るものと考へねばならぬ。斯くの如き社會に於ては經濟的ディメンジョンは發生し得ない。唯、個々の財貨に對し、習慣に依つて定まれる「原始的價格」が存在するのみである。それには經濟的ディメンジョンの有するが如き「常に一般に妥當する」性質が備つて居らぬ。

經濟的ディメンジョンが發生する爲には、先づ、習慣が交換を支配するといふ狀態が破られ、經濟に合理主義の精神が入込んで來なければならぬ。かゝる事情は、社會に商人が出現し、市場が生れ、競爭が行はれ一般的に共通の尺度に依る交換比率の計算が自由に爲るに及んで初て生ずる。即ち交換に際し商人間に競爭が行はれる樣な狀態に於ては、個別的な「原始的價格」の場合と異つて「全體に對する顧慮と個々に對する注意」（註六三）が交換比率に影響を與へるに至る。が併し單にそれ丈けでは經濟的ディメンジョンの概念は發生し得ない。其發生には、かゝる交換比率が社會一般に妥當性を有する樣になり財貨に弘く流通性が與へられる樣な社會狀態が出現することが必要である。此狀態は社會に計算に役立つ貨幣が流通するに及んで成就せられる。貨幣に依る計算が可能に爲ると、從前、無數の財貨の各一對の比較それ〴〵に附隨して居つた交換比率を總て皆均一の稱呼の上に立つ數に統一することが出來る樣に爲る。「此事は即ち經濟的ディメンジョンに依る思考が可能となることを意味するに外ならぬ。「……經濟的ディメンジョンに依る思考は總て皆貨幣の大さに於ける計算と一致する」（註六四）のである。之と同時に計算貨幣といふ觀念も亦反面に經濟的ディメンジョンの成立を意味してこそ有意義なのである。則ち「計算貨幣と經濟的ディメンジョンは根本的に相互に條件付け合ふものである。計算貨幣なくしては經濟的ディメンジョンはあり得ないが、併し一方經濟的ディメンジョンの成立に役立つといふことに依つてのみ計算貨幣としての意義があるのである。」（註六五）

註六三　Gottl; a. a. O. S. 78.
註六四　Gottl; a. a. O. S. 82.
註六五　Gottl; a. a. O. S. 83.

此處で一言注意すべきことは、ゴットルの此計算貨幣の概念が必しも發達せる經濟社會に實際に流通する貨幣を意味するものでないといふことである。交換媒介の手段として、或は又價値支拂の手段として、或は又價値貯藏の手段としての貨幣の職分は勿論、現實に或貨幣が流通するといふことも亦必しも必要ではないのである。單に計算に役立つ貨幣としての事實さへ存在すれば足りる。即ち必しも現實に貨幣が社會に流通することを意味せぬ。而して計算の手段としての貨幣からして漸次、支拂手段交換手段としての職分を具へたる貨幣が發生して來ることに爲る。貨幣に關するゴットルの此學說は一つの貨幣學說として注目すべきものであらうが（註六六）此處で此以上論究する必要は無い。

註六六　Amonn; a. a. O. S. 267

貨幣の職分が發展すると、交換は必然的に購買と販賣とに分たれ、商品が發生し損失・收益の計算が可能となり

從つて「營利としての經濟」が發生するに至る。商人的行爲は一般化せられ、あらゆる種類の生産の商業化あらゆる財貨の普遍的流通性が普及するに至る、斯くして「經濟的ディメンジョンは外部に向つては經濟主體間の交易に對する標準を提供する、即ち供給と欲求に對する支柱を與へ、る他方內部に向つては、あらゆる見積の標準となり、此見積に際してはあらゆる計算に對して支柱を與へる」（註六七）のである。

註六七　Gottl; a. a. O. S. 99.

「經濟的ディメンジョンの生成」と題する一章に述べられた以上の說明は何を果したであらうか。「生成」其物の說明は少しも與へられぬ。唯其生成の條件が述べられて居るに過ぎぬ。經濟的ディメンジョンの本質は何處に存するのか。その「特質ある數は具體的に如何にして生れて來るのか、「常に妥當する大さ」は如何にして定められるのか、此間の關係は全く明でない。初の章に於て經濟的ディメンジョンは價格の過去の全系列の綜合概念として發生し來たることが說明されたが、それ丈けが發生に關する說明なのであらうか。然りとすれば其過去の價格は如何にして夫れ〳〵の高さに位して居るのか。ゴットルに據れば、之を定める中心的役割は經濟的ディメンジョンの演ずる所でなければならぬ。此處に論理の循環が始まる。ゴットルは此循環を解く目的の下に經濟的ディメンジョンの生成を論じ、筆は一般的交換なき社會に於ける「原始的價格」に迄溯つたのであるが、不幸にも此目的は到達せられたと見受けられぬ。「原始的價格」は習慣と傳統が之を支配する、即ち交換比率は習慣と傳統に依つて定められるのであらうが、貨幣の流通する交換經濟社會に於ては如何。各人は合理主義の精神の下に自由競爭を行ふ。習慣の支配に代つて商人の營利的行動が優勢と爲る。交換比率の計算貨幣が流通するといふ條件の下に共通の稱呼に統一されることに爲るといふことは換言すれば「經濟的ディメンジョンに於ける思考」が一般に行はれることに外ならぬ。――之丈けがゴットルの長い說明の骨子である。經濟的ディメンジョンの正體は依然として不明である。如何なる事實關係を指して斯く名付けるのであるか。又價格と經濟的ディメンジョンに關する說明が單に之丈けに終るならば――事實、ゴットルは價格の究極的根據を求めるの愚を嘲つて居るのである――「經濟的ディメンジョン」なる概念は決して從來「價値」なる概念の下に意味せられて居つた所の事情を指すものであり得ない。併し吾々は結論に至る前に更にゴットルの言ふ所を聽かう。

第五章に於てゴットルは「經濟的ディメンジョンの意味」を探究してゐる。即ち各財貨の經濟的ディメンジョンの背後には何が存在して居るか即ち經濟ディメンジョンの根據を問題とする。ゴットルに據れば日常語では「購買力」と呼ばれて居るものが之に相當する。併しながら、之は現實より離れた「財貨論」から生ぜる誤れる思惟なのである。價格全體の結果たる經濟的ディメンジョンをば是まで購買力」と言はしめて居つた理由は、個々の財貨の一定數量が交換される其交換の量的取引即ち價格の根本的根據を求めんとする在來の價値論一般の先入見に在るのである。即ち其根據が財貨の購買力に在り、購買力の源は「價値」又「價値評定」に在ると說く考へが內に潛んで居つたが爲である。

ゴットルは主張して曰く「經濟的ディメンジンは其自體確に客體に固着して居るが、併し客體の世界、即ち『財貨生活』は決して彼の『より大なる關係』ではない。」……即ち「經濟的ディメンジョンは生活としての經濟の大なる關係に於て觀察せられる」のである。「然るに此生活は……經濟生活の主體に基礎を置くものである。あらゆる交換は常に經濟の主體と主體との間に行はれるものであるが、それと同樣に經濟的ディメンジョンも亦經濟主體に對して充分の意義ある（sinnvoll）關係に於て成立する」（註六八）と。此處に於て吾人は漸く經濟的ディメンジョンの

本質を推定することが出來る。それは即ち或財貨が經濟主體に對して有する充分なる意義（sinnvoll）といふことにあるものゝ如くであると。

註六八　Gottl; a. a. O. S. 100.

此定義に於て、「充分なる意義」とは如何なる概念かゞ問題と爲る。之を說明するに先立つて、ゴットルは經濟主體の意味を說明して居る。此主體は、企業家として或は商人としての單なる一個人を意味するものではない。ゴットルに依れば斯る概念は在來の理論が想像せる虛構に墮せるものである。元來人間は經濟社會に於て一つ〳〵の經濟組織體に屬して居る。而してあらゆる經濟行爲、あらゆる交換は此經濟組織體の代表者としての行爲に過ぎぬ。其故に各個人の行爲は經濟組織體に於てそれが如何なる地位に在るかを考慮しなければ其行爲の本質を理解せられぬのである。從つて客體と經濟主體との關係も同樣に組織體の代表的主體としての各人に對する關係としてのみ之を觀察せねばならぬのである。

經濟主體に關するこういふ說明の仕方は全體主義的な方法論から見て當然かも知れぬが併し、具體的に何れの點に於て、從來の理論が假定せる個々の經濟主體と相違するのか、經濟行爲として觀て、その何れの方面に根本的差異が存在するのか、明瞭でない。ゴットルは從來の理論に於ける經濟主體をば「營利の繰人形」と嘲笑的口調を弄して居る。（註六九）此點に關しては後に論ずることゝして、問題は或財貨が「經濟主體に對して有する意義」である。ゴットルは之を說明する爲に先づ「效用」「價値」の概念を非難することから始める。蓋しゴットルは、經濟主體に對して有する意義」として見たる經濟的ディメンジョンが在來效用と呼ばれ來つた事實を指すものと考へたからに外ならぬ。ゴットルは曰く、「上述の事柄は（從來の價値論特に限界效用說を批判せることを指す――筆者註）總で此際背景として役に立つものである。即ち客體に對する主體の關係に關し、吾人は現實に對して不必要に暴力を加へるものでないといふ明瞭な意圖の下に述ぶる所のものが、上述の諸價値論より如何に掛離れて居るかに依つて、益〻明白に表示せられるのである。（註七〇）と。吾人も亦ゴットルの此考へが正當であることを推定することが出來る。

註六九　Gottl; a. a. O. S. 7, 97, 102, 114, 116, 135, u. s. w.

註七〇　Gottl; a. a. O. S. 115-6.

ゴットルが其非難の第一聲を自己の方法論から始めて居ることは、經濟主體に對する場合と同樣である。「總て本節に關係あることは、經濟に關するあらゆるもの即ち交換も將た又經濟的ディメンジョンをも、生活としての經濟の偉大なる關係に於て見ることである。此努力は在來の理論に於て全く認められて居らぬ。……人々は常に根本的に單純化して觀られたる客體から出發し、主體から或目的を引出し、客體の特性が此目的に應ずるに從つて、人はそれより直接に主體に對する或關係が生ずるものと考へる。此特性とは當該客體の『有用性』として一般に通用する所のものであり、此或關係は內容から觀て客體の『效用』と呼ばれ、或は客體の關聯其自體として其『效用性』と呼ばれるものである」（註七一）と。

註七一　Gottl; a. a. O. S. 112.

「效用」に「稀少性」が附加へられると「價値」の觀念が發生する、效用なり價値なりは或量的な大さと看做され「購買力」の源と爲り、交換の量的取引を說明する究極的原因として想定されるに至る。人々は量的の大さのある效用に從つて各種財貨に對立し、其價値に對し反動的に行動する所の「營利の繰人形」に爲る。人間は單純に財貨に

對立し、繰人形の行ふ反射的な交換現象が起つて來る。(註七二)

註七二　Gottl; a. a. O. S. 112-3. 參照

斯樣な考へ方は、總て生活としての經濟を理解して居らぬことから起る。

即ちゴットルに據れば「經濟するものゝ、其客體に對する關係は、其人が組織體の代表的主體として立つ際の其行爲の形式及び方法に從つて律せられるのであつて、其反對に客體から其人に向つて作用し掛ける其關係に依つて初て『財貨』に對する單なる『態度』が强ひられるのではない」(註七三)のである。「經濟する者は決して個別的な客體と妥協するものではない。」「經濟するとは、根本に於て、關係に外ならぬ。」「任意の個々の物に對する決意は全體への顧慮を要求する。……それは全體に對する關係から發する。個々のものはそれ〴〵全體に對して特定の地位に在り、特殊の役割を占めて居る」(註七四)。

註七三　Gottl; a. a. O. S. 116.

註七四　Gottl; a. a. O. S. 116.

組織體の代表的主體として行動することをゴットルは處分（Verfügung）と名付ける。處分を行ふといふことは生活を可能ならしめ其繁榮の爲に備へる」(註七五)ことを意味する。蓋しそれは「一人格としての經濟に對する意思」(註七六)の現れであり、而して其意思は常に「生活としての經濟即ち「欲望と充足とを繼續的に調和せしめんとする精神に於てなされる人間の共同生活の構成の上に向けられて居る」(註七七)からである。

註七五　七六　七七　Gottl; a. a. O. S. 121.

此處分といふことは全體としての欲望を對象とするものである爲め、限界效用說に見るが如き限界の觀念は無用となる。效用決定は全體に關聯せしめられる。「全體に關する計畫が個々の各行爲を支配する」處分し得るものを欲望に對して統一的に配布することがあらゆる經濟の中心であるのである。(註七八)

註七八　Gottl; a. a. O. S. 122. 之が在來の理論に於ける『最高度の欲望滿足』を目的とすることに類似するものであることはゴットル自ら認める所である。

或る客體が處分可能であるといふことは、取も直さず之に對して主體が處分權力（Verfügungsgewart）を持つて居ることを意味する。併し、主體は一定の個々の客體に對して個別的に處分權力を持つて居るのであるが、それは謂はゞ具體的なものである、處分權力の範圍は客體によつて相異るし、其內容は經濟主體の立場から觀れば雜多な內容を表示することに爲る。然も主體が客體に對して決意に依つて與ふる一定の效用は、全體との關係に於て一組織體を代表するものとして生ずるのであるから、個々の客體の處分權力は、個々別々に數量的に之を把握し得ない。此意味に於て在來の所謂る「價値評價」は假象であり、經濟主體に取つて寧ろ行爲の反映でこそあれ、其行爲を決定する基準とは爲り得ぬものである。(註七九)

註七九　Gottl; a. a. O. S. 126.

さて處分權力の範圍は主體の處分の領域から生じて來るか、此範圍は、經濟主體が其時々に於て處分し得る客體の綜合、即ちゴットルの所謂る所有（Habe）の綜合概念である。ゴットルは處分し得るものゝ此全體をば「形成體の範圍」(Gestaltungsbereich)と名付ける。或主體の所有の下にある客體は全體として「形成體」の中に統一されて居る譯である。從つて經濟主體はあらゆる客體をば形成體の關係に於て觀察するものでなければならぬことに爲る。然も形成體は人間の理性的考慮のみに依つて許り生じたものでなく、「生活としての經濟」よりする考慮から生れた

ものである。

所で、欲望に對して統一的に處分し得るものを配布する爲には、何としても處分權力を直接にせよ間接にせよ數的比較計量し得なければならぬ。然るに單に個々の財貨の處分權力を數へ上げることはゴットルの立場からは、無意味であるし、又形成體の關係に於て之を觀察して居る限りは數量的觀念を之より引出すことは不可能である。ゴットルは茲に、好都合な別箇の方法を見出す。「諸客體より成る形成物を、單純であるが併し意義なる量（sinnvolle Mengen）に均一化すること」（註八〇）即ち之である。「有意義なる」とは勿論「經濟組織體に對する關係に於て、」（註八一）言はれる言葉なのである。

註八〇　八一　Gottl; a. a. O. S. 133.

斯く「客體の處分し得るものが此數量的方法に於て有意義なるものと考へ得るならば、處分可能性の關係は主體の一屬性として、其量的處分可能として言ひ表はすことが出來る」（註八二）ゴットルは量的衣現を與へられたる處分權力に新名稱を與へ、主體の處分力（Verfügungsmacht）の有意義なる分量性と呼んで居る。處分力は「個々の客體に對する處分權力に基き、又全體としての客體の處分範圍に基いて」（註八三）量的な處分可能として發生するものであるのである。

註八二　八三　Gottl; a. a. O. S. 133.

是丈けの說明の後に漸く經濟的ディメンジォンに考へが及ぶ。即ちゴットルに依れば經濟主體は、處分力に依つて、費用としての財貨の見積を行ひ技術的理性の原則（所謂る經濟的原則）に從ふことが出來、各經濟組織體を量的に比較し、處分範圍を明瞭に「財產」（Vermögen）として考へるを得せしめ、更に又經濟に對する意思を一定の關係に就かしむることが出來る。換言すれば、處分し得るものをば欲望に向つて配布するを得せしめるに至るのである。（註八四）が此任務を果すには「經濟的ディメンジォンに依つて即ち貨幣の大さに於て考へる」（註八五）より外に方法は在り得ぬのである。斯くして「經濟的ディメンジォンの意義は今や明に爲る。即ちそれは、各客體の特質ある數として、客體に對する處分權力に依つて主體に與へられる所のその處分力の程度を貨幣の大さで表現するものである」（註八六）「若し人が或分量の客體の別々なる呼名の數をば經濟的ディメンジォンの均一な呼名の數に入換へるとすれば、それは恰度表書を記した箱を云々するのに等しい。即ち箱は客體の種類を意味し、表書は其經濟的に特質ある數を意味する」（註八七）「處分し得る或分量の客體を處分權に轉換せしむることは、唯、經濟的ディメンジォンの援助を以て算へ換へることに依つてのみ生じ得る。」（註八八）

註八五　Gottl; a. a. O. S. 140.

註八六　Gottl; a. a. O. S. 141.

註八七　Gottl; a. a. O. S. 143.

註八八　Gottl; a. a. O. S. 153.

ゴットルは經濟的ディメンジォンに關し之より更に詳細な說明を引續き行つて居るが、其本質はより以上明瞭にされて居らぬ。故に彼の說の紹介を大體此處で打切ることゝする。

五　價値か經濟的ディメンジォンか、

是等の定義や說明から吾々は如何なる結論を引出し得るであらうか。吾々の觀る所に據れば、經濟的ディメンジォンは單なる數たる以上を出でぬ。即ち處分力を表現する爲の一手段、經濟主體をして各客體の效用決定を爲すを得

せしむる或共通の呼稱單位以外のものではあり得ぬ。其は決定せられたる處分力の程度を共通の呼稱の上に表現する所の一つの「假面」であつて何等かの積極的內容を備へたるものではあり得ぬ。此點に於て經濟的ディメンジオンは在來の價値論に於て見らるゝが如き「效用」や「價値」の概念即ち、吾人が財貨の或性質に對して認める共重要性といふが如き實質的內容を具備するものでは無い。併し、他方「處分權力」又は「處分力」の概念は些か「價値」の概念と類似せるものがある。蓋しそれは「客體が主體に對して有する意義」に外ならぬものだからである。經濟主體が全體としての欲望を統一的に充足せしめんと努力する爲に各客體の處分力に應じて處分を行ふのであるが、其際處分力は經濟的ディメンジオンに依つて表現される。之は丁度限界效用學說が財貨の處分を各財貨の限界效用に應じて行ふことを假定せるのに類似して居る。がそれは類似に止るのであつて決して觀方を違へた相等しき概念ではない。效用學說に於て「價値」は飽くまで主觀的觀念である。或財貨が經濟主體に對して有する重要性とは當該主體が其財貨に對して主觀的に認める所の性質であり、財貨に固有な性質ではない。之に對し「處分力」はゴットルの說明に據れば要するに、或權力又は能力なり、財貨が客觀的に具備して居る固有の性質である。之を經濟的ディメンジオンに依つて表すことは物の長さを尺で、物の重さを量目で表すのと同樣なのである。處分力は、客體が主體に對して有する有意義の程度であるが、分量的に處分し得る客觀的なものなのである。それは畢竟在來の理論に於ける購買力に比せらるゝ概念なのである。人或は說を下して、「主體に對して有意義なる」客體の或性質が客觀的なる經濟的ディメンジオンを通じて表現せられるばこそ、「處分力」は量的な客觀的觀念たり得ると解釋するかも知れぬ。換言すれば、ゴットルは經濟的ディメンジオンなる概念に於て價値の概念と其量的表現の一手段としての貨幣概念とを結合したのではないかと推定されぬこともない。此推定は同時に經濟的ディメンジオン其物に關するゴットルの定義の矛盾を解釋する鍵ともなる。即ち其本質に於て單なる「數」、單なる「假面」たる經濟的ディメンジオンが、「交換實行に對する規定的規範」たり、「將來の價格に對する基礎」たり、「あらゆる見積りの規準」たり得る職分を果すといふ、本質に矛盾した性質を具へて居るとすれば、それはゴットルが經濟的ディメンジオンの性質を云々する場合に暗々之の背後に存する「處分力」を心中に意識して居つて論述したのであらうと推察することが出來るのである。ゴットルが經濟的ディメンジオに對して與へて居る所の變化自在の相矛盾し合ふ性能は實に此二種の混合又は結合から確に生れることの出來るものである。

「經濟的ディメンジオンは貨幣の大さに於ける計算とに一致する」といふのなれば、何をわざ〳〵苦心して「經濟的ディメンジオンなる新語を製造する必要があるのであるか。

ルドルフ・シュトレラーは此間の事情を察し、ゴットルの意を汲めるが如く左の樣に述べて居る。『經濟的ディメンジオンなる名稱を新に輸入したことは、それが一方に於て『貨幣の大さに於ける計算』他方に於て『價値』の二種の概念を代表するものであるからして、正當に是認せらるゝものであると、ゴットルは抗議するであらう」と。

（註八九）即ち經濟的ディメンジオンが單に從來の價値概念か又は貨幣的計算手段の概念の何れか一方のみを意味するならば、其存在理由は無いが、兩者も合併せる概念であるとすれば、從來存在しなかつた新概念であるから存在理由があるであらうといふ意である。

註八九　R. Streller; Anter der Herrschaft des Wortes. S. 53.

が、此二つの概念を結合することが不當な次第は敢てシュトレラーの說明に俟つまでもないであらう。「確に吾々は吾々の『價値評定』を其儘言葉に現すこと無く、單に貨幣の大さで活すことが屢、ある。現代の人々は直接に問

題としないで、或何等かの外部的表象に從つて發表する傾向があるものである。……之を例ふれば、吾々の居室を暖めるに當り、又吾々の衣服を選擇するに際し、吾々の主觀的溫度感に依らず單に寒暖計に從つて之を行ふことが屢〻ある。が併し斯く寒暖計に從つて居るのは、唯〻『客觀的』な溫度測定の結果が吾々の主觀的な溫度測定と餘り掛け離れて居らぬ間丈けに限り保持されるに過ぎぬ。特別に寒い或る夏の日には吾々は寒さを訴へるであらう。而して冬ならば『暖い』と考へたらうと思はれる冬の或る日よりも塞暖計は遙に高い所に在あるとしても、吾々は上の判斷から離れる樣なことはない。」（註九〇）換言すれば吾々は飽くまで主觀的感覺に從つて行動するものであつて、唯〻、便宜上或外部的表象を通じて其感覺の强さを訴へるのである。それ故に表面的に存在する或る客觀的假象と其背後に隱れて居る主觀的本質とを結合して一概念の下に包括させることは不合理そのものといふより外はない。其本質が何の程度の假面を被るかは決して客觀的に一定せるものと見ることを得ぬのである。然れば經濟的ディメンジォンなる概念は、此兩種の概念を併合せるものとして論理的にも現實的にも存在し得ざるものであつて、ゴットルの空想の產物と推定するより外なく、又若し兩者何れか一つの概念に過ぎぬとすれば、其存在理由がない筈である。或は又此兩者の何れでもなく、之を併合せるものでもない別の第三者であるとすれば、一體如何なる事實を指すのであり得やうか。上述のゴットルの所言よりして吾人は其了解に苦しむのみである。吾人は經濟的ディメンジォンなるものは存在し得ないといふアモンの說を認めぬ譯には行かぬ。

註九〇　Streller; a. a. O. S. 53.

即ちアモンは曰く「ゴットルが理解し、一定せんと欲する所の本質を概念的に理解し且つ一定せんとして失敗するはゴットル自身の未熟の爲に存するのでは無く、全體此本質其自體に在るのである。……不幸なる誤は斯る本質が存在して居らぬといふことに在る。存在するものは交換行爲と、之に依つて與へられ、而して交換し得る財貨の間に存する所の交換關係とである。併しそれだからと言つて、『常に妥當する大さの意味に於いて存する事物に附著する所の經濟的に特質ある數』（Vgl. Gott; a. a. O. S. 285）なるものは存在しない。『財貨』相互が並に『財貨』と『貨幣』との間に交換關係がある。更に又一定の前提の下に於ては、財貨相互間にも財貨と貨幣との間にも、或安定性がある。之こそ吾人が經濟學の下に取扱はねばならぬ事實なのである。此事實は、茲に觀らるゝ如く、僅少の簡單な言葉を以て表現せられる生活上に於て、將た又科學の上に於て、人は通例此事實を『價値』及び『價格』なる言葉で以て表現する」（註九一）と。

註九一　Amonn; a. a. O. S. 263.

吾々は經濟的ディメンジォンに關する最後の疑義を述べやう。それはゴットルの學說の根本的土臺たる「生活としての經濟」と「經濟的ディメンジォン」との關係である。生活としての經濟とは、既に屢〻述べた如く欲望と充足との繼續的調和を眼目とせる人間の共同生活の形成體である。而して人間は斯くの如き共同生活を營むに當り欲望と充足との繼續的調和を如何にして行ふのであるかといふに、ゴットルに依れば經濟的ディメンジォンが實に之を果さしむる職分を擔ふのである。即ち「經濟を意味する所の均衡は、經濟組織體の內部に取つても又外部に取つても、等しく、交換的關聯の道を通じて欲望と滿足との間に一般的に行はれる。併し、此大規模な經濟生活の全範圍に亘り何處にも均一に、此均衡を保證するものは經濟的ディメンジォンに外ならぬ。」と。（註九二）經濟的ディメンジォンは常に妥當する或數を意味するものとして、交換に規範を與へ、交換に關與せる一切の經濟組織體に對して、欲望と充足との調和を確保し、「かくしてあまねく生活の維持と永久的存續とが保證せられるのである。」（註九三）。

註九二　註九三　Gottl; a. a. O. S. 105-6.

經濟的ディメンジオンは果して此役目を仕遂げ得るものであらうか。其「數」は一體如何にして決定されたのであるか。「經濟的に特質ある數」の高さを定めるものは何であるか。當に妥當するといふ其究竟の根據は何であるか。吾々は最後に至るまでの長い說明の間に此疑問を明に說ける章句を見出すを得なかつた。其數の決定は唯、欲望と充足との間の關係如何に依ると推定するより外に考へ樣が無かつた。蓋し經濟的ディメンジオンの發生に直接關係のある所の、あらゆる價格現象は總て皆生活としての經濟を營む人間の行動から出ずるものであり、人間の經濟的行動は貨幣的計算手段としての經濟的ディメンジオンの援助に依つてのみ、合理的に、全體としての經濟に對する意思を定め財貨の見積を行ふことが出來、效用決定を實現することを得、かくして欲望と充足との間に一致を與へることが出來るのである。

ゴットルの此議論は確に、シュトレラーの指摘する如く、「價格は平衡に向つて努力する傾向がある。而して此平衡は、需要と供給とが常に數量的に一致する時に得られるといふ著名な命題に歸する」（註九四）と考へてよいであらう。然もゴットルの說明は此命題以上の詳細な內容を一言一句も傳へて居らぬ。如何にして「欲望と充足」との間に調和を與へるのか、「維持と繼續」とは如何にして保證せられるのかに就ては少しも明でない。

註九四　Streller; a. a. O. S. 54.

吾人の考ふる所を以て觀れば、從來の價値理論こそは實に此間の事情の說明に役立つものに外ならぬ。ゴットルは價値理論を排し經濟的ディメンジオン論を以て價格形成の現象を說明しやうとしたが、それは結局說明せらる可き當の問題たる價格現象を以て經濟的ディメンジオンといふ新概念を說明するに類する逆な結末に終つてしまつた觀がある。經濟的ディメンジオンの概念は價値の概念に代るものではあり得なかつたし、又前者は後者の意味する一定事情を包括するものでもあり得なかつた。

加之、ゴットルは價値論特に限界效用說を誤解して居る。誤解の第一は、方法論に於て、個人主義的、原子論的なるの故を以て此學說の立場を非難して居ることである。（註九五）何が故に誤つて居るのか。凡そ或方法的言說を排斥せんとするには、それが自己の正しいと信ずる立場と背馳するものであるといふ理由を擧止するのみでは無益であつて、該方法論が現實の說明に成功せぬ、換言すれば本來の目的に適合せぬといふことを證明せねばならぬ。其處で「方法的個人主義」又は「原子論的解釋」に就てゴットルは如何なる「非合目的性」を擧げて居るか。ゴットルに依れば方法論的個人主義と原子論的解釋とは、人間の共同生活といふものを無視し且つ各個人と共同生活との關係を理解しない、而して此方法論に據れば經濟生活は個々の人間でなく個々の行爲に分解される。此行爲の背後には「經濟人」の代りに「機械人間」、「營利の繰人形」が糸を引く、「交換に對する決意は經濟の全體に鑑みて全體に對する關係の考慮から生ずる」（註九六）といふことが原子論的解釋では省みられぬのであると。

註一〇〇　更に他の誤解は、在來の理論が效用を數量的に測定し得るものとしたと考へたことである。即ち效用說に據れば經濟主體は「決樂利得」、「價値收益」又は『費用』以上に超過する『效用』に於ける數量的差異に從つて交換を行ふ（Gottl; Wirtschaftliche Dimension, S. 114）と述べて非難して居るのであるが、之が偏見・曲說であることは改めて述ふるまでもない。更に又在來の理論が、人は經濟を行ふる際して欲望の段階的秩序を一定せるものと考へたと言つて難ずるが（Gottl; Bedarf u. Deckung; S. 31）之も誤解である。一體何の著者が何處で斯樣な前提を用ひたか、恐らくゴットル自身も指摘し得ぬであらう。

註一〇一　Gottl; a. a. O. S. 100-101.

確に、吾々は現實に全體との關係から離れて一つ〳〵の交換を判斷し且つ實行するものではない。吾々は吾々の行ふ一つの經濟行爲が將來に對し、或は又現在の他の事情に對し如何なる關係の下に立つかを考へて、然る後に之を實行し又は實行を中止する。ゴットルは在來の理論の何れが此事實を無視したといふのか、方法論的個人主義を採用する限界效用學派の誰が「營利の繰人形」を主張したのであるか。吾人は之を知ることを得ぬ。シュトレラーの指示する如くゴッセンに於て既に全體に對する考慮が注意せられて居るのを見る、即ちゴッセン曰く「人間は、多數の享樂の間の選擇を自由に行ひ得るが、之に要する時間を充分に持つて居らぬ場合には……人間は享樂の全體を部分的に整へ、然も各一つ一つの享樂の大さが、其滿足の中止さるゝ瞬間に於て、總て皆均一である樣に整へねばならぬ。」（註九七）と。其他經濟的平衡論を說くワルラス、パレート、シュンペーター、カッセル何れも皆全體を無視して居るものはない。

註九七　H. H. Gossen; Entwicklung der Gesetze des menchlichen Verkehrs, 3. Aufl., Berlin 1927. S. 12, zit u. Streller; a. a. O. S. 37.

經濟主體が種々なる欲望に對立して如何なる考慮を拂ふかをゴットルは其全體主義的な方法論から何う取扱ふかといふに、彼は效用說と同樣に「生活に最も必要なる欲望の充足」（註九八）を以て經濟が始るといひ、欲望の强さが、其行爲の順序の規準の要素であることを認めるのである。（註九九）

註九八　Gottl; Bedarf und Deckung, Jena, 1928. S. 46

註九九　Gottl; a. a. O. S. 46-8.

此處まで論じつめて來ると、「在來の理論とゴットルの說との間に、價値及び價格論に關して何處に根本的相違があるのか不明に爲つて來る。「欲望と充足」との關係を說明せんと試みる限り、ゴットルの說は限界效用學派の理論に頗る接近して來る。經濟的ディメンジョンの說明に於ては、ゴットルは遂に欲望と充足との關係を明瞭に說明し得なかつた。「經濟的に特質ある數」が如何にして定めらるゝかを明にしなかつた。「あらゆる價格の根底」を求むることは言葉に支配されるからこそであると言つて之を問題にせざるの趣があり、單なる循環的論理で滿足して居るが如くであつた。が矢張り最後の究明を追求するゴットルの科學的努力は結局、欲望と充足との關係を詳論するに至らしめた。ゴットルの近著 "Bedarf und Deckung" は此努力の結晶である。然も其中に述べられてあることは限界效用說に類似して居るのである。經濟を行ふものは種々なる欲望滿足手段をば種々なる欲望の上に如何に分配するかといふに「吾人は之を次の樣に言表すことが出來る、即ちそれ〴〵の欲望（Bedarf）には……一定の欲求の重壓（Wucht des Begehrs）が內在して居ると。欲求の重壓は、個々別々の欲望に在つては……感情の力に依りて妥當するに至り、共同的欲望に在つては理性の力に依つて妥當するに至る。」（註一〇〇）例へば或人が觀劇の機會を失はぬ樣に其骨牌遊戲を中止する決心を爲すか何うかといふ問題を考へて見ると了解し易い。欲求然も一定の重壓ある欲求は兩者何れにすべきかに迷ふ。此場合、決定が全然感情に應じて生じ得ることは疑ひ無い。……蓋し人は簡單により强き」重壓に依つて「驅られるからである。假に其人が劇場へ行くとすれば、吾人は、觀劇の欲求の重壓が『より强きもの』であつたこと、『上位』を占めたことを直に知るのである。」（註一〇一）「結局吾人は生活に必要なるものに關する判斷の方面からして、欲望と欲望の上位下位を確定することに歸着するのである」（註一〇二）

註一〇〇　Gottl; Bedarf u. Deckung, S. 33.

註一〇一　Gottl; a. a. O. S. 35

註一〇二　Gottl; a. a. O. S. 35.

正にシュトレラーの說く如く『欲求の重壓』と『生活に必要なるもの』の認識との二つの考慮が經濟者を驅り動す。而して之はか『主觀的價値評定と異るものであるか、之は舊き概念に對する新しき名稱、古き酒に對する新しき嚢に過ぎぬものではないか。『欲求の重壓』といふ用語と『價値』といふ用語との間に或區別を確定することは不可能である。兩者は同一の概念である。其意味する內容は、經濟者が先づ第一に、最も强く妥當する所の欲望を滿足させるといふことである。經濟者が一定の欲望滿足手段をより高く評價すると言はうが、欲求はより大なる重壓を持つと言はうが、唯單に表現方法の問題にすぎぬ」（註一〇三）

註一〇三　Streller; a. a. O. S. 34-5.

最後に吾々は結論として左の如く言ふことが出來る。經濟的ディメンジョンは、論理的に矛盾せる概念である。一方に於て論爭の當の相手の概念を曲解し、他方、自らは存在し得ざる概念を存在せる如く想定して獨り相手を取つたのがゴットルのディメンジョン論である。經濟的ディメンジョンに固執する限りゴットルの價値價格論は不完全であるが、之から離れて限界效用說に類似せる說明を爲す點に於ては、經濟的ディメンジョンの缺點を補へる觀がある。此事は結局ゴットルの經濟的ディメンジョン論が「在來」の科學を無視し、「從來の」理論を輕蔑して學問上のロビンソー・クルーソーを演ぜんと欲したことに存するものであらうと。

附記　ディメンジョン（Dimension）なる言葉をば譯せず其儘使用したのは、之を强ひて「擴がり」とか「大さ」とか或は「次元」など丶譯して著者の意味せんと欲する所の本來の語義に曖昧を與へることを恐れたからである。

フランス革命と民衆運動

——其指導者とその性質——

小泉順三

一

大なる社會變革は常に騷亂と不秩序を生むものである。而して熱に浮かされた民衆はこの雰圍氣の中にあつて、狂奔と破壞と叫喚を好むものである。

我々はフランス革命史を繙く時、屢々狂激なる民衆の行動を眼前に彷彿せしめる。我々は民衆の直接行動を見る時、そこに行はれる破壞を思ふ時、財產に對する革命的民衆の無意識か、或は、有意識的な攻擊の存在を肯定する傾向をもつ。この理由に依つて、民衆の一族に於て、フランス革命は社會主義的實行力の何者かを所有してゐなかつたかと考へて見る事も出來る。然し、リシュテンベルヂエは其名著「社會主義とフランス革命」に於て、この種の見解を否定して、「それは社會主義或は民衆心理の根本的原理に奇妙な誤解をしてゐると云はねばならぬ。掠奪のあらゆる行動は、社會的に所有權回復の一行動ではなく、意識的理論から出發しない場合の個人的衝動である。一片の骨を盜む犬が社會主義者でない樣に、一片のパンを盜む飢えたる者も社會主義者でない」と云つてゐる。（Andre Lichtenberger, Le So.ialisme et la Revolution française p. 88）